

公表

児童発達支援事業所における自己評価総括表

○事業所名	Grabity LiNE		
○保護者評価実施期間	令和6年1月1日		令和6年12月31日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	4	(回答者数) 2
○従業者評価実施期間	令和6年1月1日		令和6年12月31日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	8	(回答者数) 8
○事業者向け自己評価表作成日	令和7年2月4日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※) だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	月に一度は必ず家庭連携を行い保護者様の思う子どもの課題や成長した姿などをお聞きして支援に繋げるようにしている。	家庭連携では事業所での様子は必要最低限にし家庭での様子や保護者様の悩みや不安を聞くことを中心として進めている。	保護者様との信頼関係の上で成り立つサービスであることを理解し、送迎時にも様子を伝えるなど相談しやすい雰囲気作りを心がける。
2	子どもに話をする際には支援者の思考を押し付けるのではなく、その状況を詳しく聞くとともに共感を重視した話を意識している。	障害特性を理解したうえで各利用者様の特性に目を向けるよう心がけている。	各利用者に目を向けるだけでなく障害特性についても学べるよう積極的に研修を行っていく。
3	支援に対して全支援員が理解して進められるように支援前、支援後の引継ぎの時間を必ずとるようにしている。	支援や利用者様に対する関わり方について研修の機会を設け各支援員の相談についても聞き取りを行っている。	職員同士の関係性の向上やチームワークが利用者様の支援の向上に繋がると考えているため、職員同士でコミュニケーションを築ける場を職場で提供していく。

	事業所の弱み(※) だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	地域との連携が不足している。	他の保育施設や地域団体とのネットワークが十分に構築されておらず、交流機会の企画や調整が難しくなっている。	地域の保育施設や子ども関連の団体と定期的な交流会を開催したり交流プログラムを企画することで、子どもたちの社会的になる。
2	利用者様の活動プログラムが固定化されてきている。	活動内容の見直しや新しいプログラム導入に向けた定期的な評価・フィードバック体制が不十分である。	子どもたちの興味関心や成長段階に合わせたプログラムを定期的し、外部講師の活用やテーマ性のある活動を取り入れることでを広げる。
3	保護者会やきょうだい支援の機会不足。	保護者交流やきょうだい支援の重要性が十分に認識されていないか、人的・時間的リソースが不足していることで、具体的な取り組みが進んでいない。	保護者会や交流イベントの定期開催を視野にいれ、きょうだいプログラムを導入したり、家族全体のつながりや支援体制を強く。